私（わたし）

学びナビ

記号

「お辞儀（じぎ）」も記号？

記号とは、ある決まった意味を表すものです。例えば、「〒」は「郵便」を表す記号です。記号には動作なども含まれます。例えば、「お辞儀」は感謝や謝罪を表す記号ともいえます。誰かに頭を下げられたときに、言葉がなくとも「ありがとう」や「ごめんなさい」という気持ちの表現として受け取ることができるのは、「お辞儀」をそうした記号として理解しているからです。文字や音符（おんぷ）、信号の色（青は進め、赤は止まれ）、道路標識、地図記号、ピクトグラム、ハンドサインも記号です。決まった記号を使うことで、決まった意味を効率的に伝えることができます。

しかし、これらの記号がそうした意味を表さない社会もあります。記号とは、ある社会や文化の中で、なんらかの拘束（こうそく）力をもつ約束ごとなのです。

記号と象徴（しょうちょう）

ここで、記号を**象徴**と比べてみましょう。象徴は、抽象（ちゅうしょう）的な物事を、それを

目標

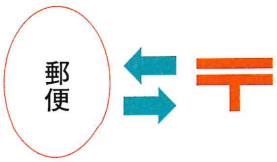
- 読書が自分の生き方や社会との関わり方を支えていることを理解する。
- 作品を読んで人間や社会などについて考えを巡（めぐ）らせ、自分の意見をもつ。

文章の種類／立ってくる春・なぜ物語が必要なのか

記号

「私」という視点／故郷

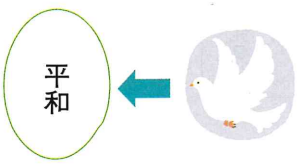
【記号】



〒＝郵便

「〒」は常に「郵便」を意味する。

【象徴】



鳩（はと）≠平和

「鳩」は「平和」の象徴。「平和」は「鳩」の象徴ではない。

連想させる具体的な事物に代表させて表すことです。例えば、「鳩」は「平和」の象徴として知られています。形のないものを形あるもので表現することにより、イメージが伝わりやすくなります。

しかし、象徴するものと象徴されるものを置きかえることはできません。「鳩」と「平和」の場合、「鳩」は「平和」を象徴するもの、「平和」は「鳩」に象徴されるものですが、「平和」が「鳩」を象徴するものにはなりません。つまり、象徴の場合、象徴するもの（鳩）から象徴されるもの（平和）への矢印は、一方向のみが可能で、逆の方向は成り立たないのです。

記号の場合はどうでしょう。記号と、記号によって示されるものは、同じ意味をもっていなければ機能しません。例えば、「〒」の記号の意味が常に「郵便」でなければ、記号として使えません。このように、記号と、記号によって示されるものとの関係は、イコールになります。

『私』では、ある人物の存在を証明するものとして、「免許証」「保険証」「パスポート」「住民番号」「住民データ」などといった「個人情報」が示されています。「情報」によってある個人が特定され、その人が存在するということが保証されるのです。では、その「情報」が二重になったり、失われたりした場合、「私」の存在も二重になったり、消えてしまったりするのでしょうか。現実には、そのようなことはありません。しかし、「私」が「私」であることを「情報」以外によって証明することは難しくもあります。「個人情報」は「私」の存在を表す記号といえるのか、考えてみましょう。

ヒント

- 作品の中で、記号とみなされているものはないか、探しながら読んでみよう。
- 登場人物それぞれの見方や考え方の違いを捉えながら読んでみよう。

P45 みちしるべ 5

私（わたし）

三崎（みさき） 亜記（あき）

十二時五十五分。午後からの業務の五分前には、必ず机に着くことにしている。私はいつもどおり、午後から処理すべき案件をメモ帳に書き出し、それぞれの処理に必要な時間と、優先順位とを頭の中で組み立てる。

――不確定要素。督促（とくそく）状の問い合わせ対応――

昨日、市内の未納者宛てに督促状を発送した。そろそろ問い合わせの電話がかかってくるはずだ。

午後一番の市民対応は、電話ではなく、来庁した若い女性だった。

近づく彼女の速度を見きわめ、私は椅子（いす）から立ち上がり、窓口に向かう。彼女が窓口に到着するのにちょうど一拍遅れて、前に立つ。待ち構えていたような圧迫感もなく、相手を待たせるでもない、経験によって導き出された絶妙なる時間差だ。

▼促

意 圧迫

文 導き出す

「この通知が、家に届いたのですが……。」

彼女がバッグから取り出したのは、昨日発送したばかりの督促状だった。

「なにか、手違いがございましたでしょうか？」

通常の市民対応に、二割ほど「謝意」のニュアンスを上積みして、私はそう尋ねた。「督促状」という性質上、問い合わせに来る市民の八割がたは「苦情」での来庁だ。自然に、対応もそれを前提としたものになる。なにしろ私は、「模範とされる市民対応」で、五年連続で庁内表彰されているのだ。対応に抜かりはない。

「どうも、私宛てではないような気がするのですが……。」

「それは……、大変申し訳ございません。」

言葉には最大限の謝意を込め、心中にはさざ波すら立てず、頭を下げる。角度、スピード、時間ともに、申し分ないお辞儀だ。

何十万人もの市民の情報を処理しているのであるから、間違いは当然起こりうる。私は頭を下げる数秒のうちに、さまざまなケースを考えていた。彼女の手元に届き、彼女宛てではないということは、住所情報と氏名の情報がずれてしまったのだろうか。もしくは、特殊な氏名に特有の「異体字」がうまく印字されなかった事例だろうか。

「失礼ですが、なにか身分証明書をお持ちでしたら、確認させていただいてもよろしいでしょうか？」

女性はバッグから免許証と保険証とパスポートを取り出した。どれか一つでいいのだが、経

ニュアンス　言葉以外のところに表された意味や意図。

▼**尋**

▼**儀**

▼**殊**

文 ……しうる

験上、こんな場合は何も言わずに三つとも受け取っておいたほうがいい。

まずは免許証の写真と目の前の本人が一致(いっち)していることを視線の動きだけで確認し、次に、督促状と免許証を照合する。

住所も、名前も一致していた。

確認の意味で、保険証とパスポートも開いてみる。旧字体や異体字なども考えられるので、字画の一本にいたるまで、詳細に見比べる。

違いは、見つけられなかった。

「失礼ですが、ご本人様宛てではない、ということでしょうか？」

「はい。」

「大変申し訳ないのですが、私には、ご住所やお名前に、間違いを発見することができないのですが……。」

「間違いがない」と言い切らず、「発見することができない」とすることで、問題の責を相手ではなくこちらに帰する言い回しのテクニックだ。

「はい、間違いはありません。」

内心の当惑を抑え込み、相手の様子を観察する。彼女は、私が「当惑」するなどとは考えてもいないかのように、なんらかの「対応」を待つそぶりだ。

過去の市民対応の積み重ねから、相手のタイプを推し量る。「無理難題タイプ」か「論理矛盾タイプ」であると推察された。この傾向(けいこう)の来庁者には、意味はなくとも、なんらかの「対

▼致

意 照合
意 内心
意 積み重ね
意 無理難題
類 推察

応」を行ったという「誠意」を見せることで、「解決」へのハードルを下げられる場合が多い。「解決」とはもちろん、「相手が満足する」という意味合いであって、実際に問題が解決されるかどうかは重視されない。

「少々お待ちいただけますか。調べてみますので。」

私は彼女を待たせて自席に戻り、情報管理課に内線電話で確認する。応対したのは幸い、同期の山中だった。

「ああ、ちょっと確認してほしいんだけど、住民番号KO—137965のデータなんだけど、最近なにか変更を加えたりした記録があるかい？」

「KO—137965ね。ちょっと待って、調べてみるから。」

受話器から、すばやくキーボードを叩く音が聞こえてくる。

「入力内容の変更はないよ。ただ……。」

「ただ、なんだい？」

「いや、たいしたことじゃないんだ。先週データ更新をした際に、間違って二重登録した市民データが二百件ほどあってね。エラーになったから、手作業でデータの一方を消去したんだ。KO—137965も、その対象だったんだよ。」

「だけど、それで入力内容が変わったわけじゃないんだろう？」

「ああ、単なる二重登録だから。データの内容自体には、何も手をつけていないよ。」

「わかった、ありがとう。」

▼更

私は電話を切って、カウンターに戻り、心配顔で待っていた女性に、事情を説明した。
「というわけで、情報が二重登録されていたので、一方のデータを消したという実績はありません。ですが、データ自体は……。」
「つまり、二つあった私のデータの、一つを消したということですね。」
彼女は、私の言葉を遮るように勢い込んで尋ねた。
「……ええ、そうなります。」
「消されたのは、私のデータなのです。」
まるで、存在自体が消されてしまったかのように、彼女は心細げであった。私は彼女の心に寄り添う姿勢を見せるべく、大きくうなずいた。
「確かに、あなたの情報は消去されました。ですがそれは、二つ存在した全く同じ情報のうちの一つなのです。どちらが消されても、残った情報はあなた自身のものですよ。」
身ぶりを交え、親身になっていることを強調した私の説明に、彼女は悲しそうに首を振るばかりだ。
「経験していない人には、わからないでしょうね。」
督促状に印字された名前に、彼女は敵意のこもった視線を落とす。危険な兆候だ。その「敵意」が、こちらに向けられないよう、対応はさらに慎重を期さねばならない。
「字面(じづら)が一緒というだけで、ここに記されているのは、『私』の名前ではないんです……。」
「わかりました。それでは、どういった解決策が取れるかを、一緒に考えてみましょう。」

意 寄り添う
意 交える

歩み寄りの姿勢を見せることで、相手に、問題をともに解決する「味方」として認識させることが肝要だ。だが、彼女は私の言葉など聞こえなかったかのように、自ら「解決策」を口にした。

「その、消してしまったデータというのが、本当の私の名前なんです。お願いします。消去したデータのほうを復元してもらえますか。」

こうした場合、代替策の提示には効果がない。「処理としては難しいが、対応は可能である」という姿勢を見せる必要がある。

「なるほど、おっしゃるとおりです。それでは、少々お待ちいただけますか。」

私は再び自席へ取って返し、情報管理課に内線電話をかけた。

「何度もすまない。さっきの件だけど、二重になって削除したデータのほうも、作業履歴の中にはまだ蓄積（ちくせき）されてるはずだよな？」

「ああ、履歴のクリアは月末にするから、まだ消去はしてない。」

「すまないが、そちらのデータを復元して、今のデータを削除してもらえないだろうか。」

「え？　……ああ、まあ、いいけどな。」

役所の仕事とは、「効率」や「合理性」は最優先されない。市民に「納得していただく」ために、無意味でもやらなければいけない業務というものは日常的に発生する。山中もそれは十分に理解している。不審げな声ではあったが、すぐに対応してくれた。

「よし、こちらの住民データは置きかえたぞ。そちらの個別システムの情報を更新しろ。それでデータは置きかわるから。」

▼蓄

「ああ、ありがとう。」

私は電話を切り、「お待たせして申し訳ありません。」と女性に断りながら、個別システムの住民データを更新した。画面上には、先ほどまでとは置きかえられた……、だが、内容的にはなんら変わりはない、彼女の督促データが表示された。

そのデータを元に、私は督促状を印刷し直した。

「こちらでいかがでしょうか。」

新しい督促状を差し出すと、彼女は不安そうな面持ちで、そこに印字された文字を見つめた。もちろん、今までの督促状と一字一句変わらないものではあったが……。

「ああ！　確かに私の名前です！」

彼女は、心の底から安堵（あんど）したように言うと、嬉（うれ）しそうに督促状を胸に抱え込んだ。

「古いほうの督促状は、シュレッダーにかけてもらえますか。」

未納料金を払（はら）った彼女は、立ち去りかけて振り返り、そう念押しした。

「かしこまりました。」

彼女が立ち去ってから、私はフロアの片隅のシュレッダーに向かった。ちょうど他にも廃棄書類が溜（た）まっていたところだ。個人情報関連の書類をシュレッダーにかけながら、今の「市民対応」を振り返る。

相手の言わんとするところに理解を示し、対処法を筋道立て、臨機応変に対応し、納得して帰ってもらう。我ながら満足のいく「模範的な市民対応」であった。

意 抱え込む

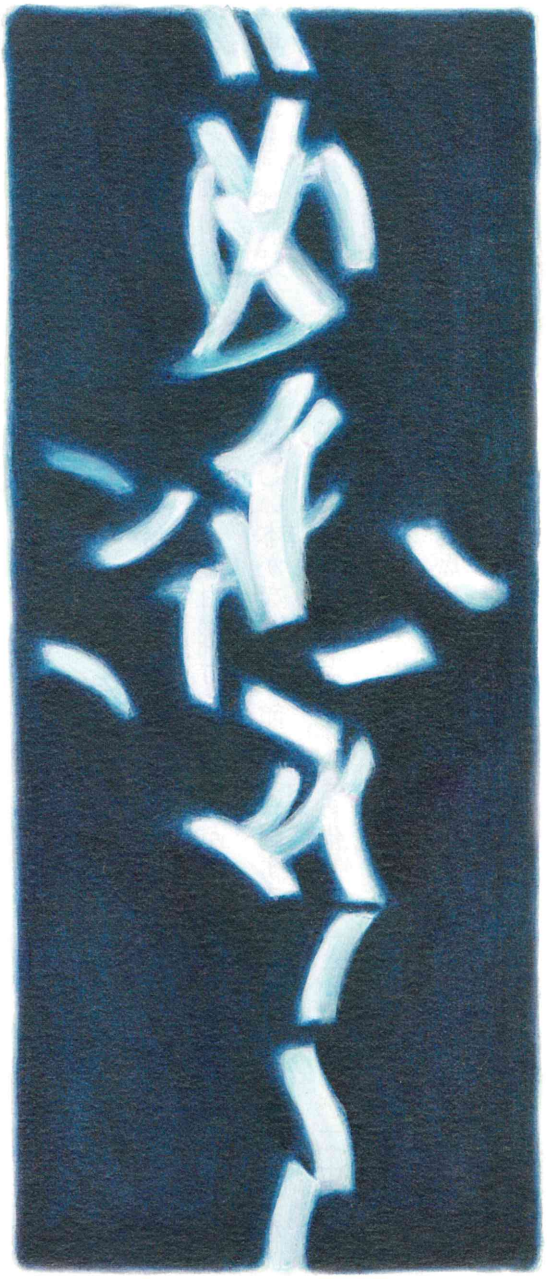
今回の事例は、私一人で把握しておけばいい案件ではなかった。「重複データ消去時の、住民データの個人との同一希薄性発生時の対応」として市民対応マニュアルに追加し、課題と解決策とを課内で共有化しなければならない。

それにしても、住民情報データと個人が、これほど密接に結びついているとは、思ってもみなかった。考えてみれば、私が「私」であるということを証明できるのは、こうして役所にデータがあるからこそだ。もしかしたら、それら全てのデータがなくなってしまったら、「私」という存在そのものも消えてしまうのではないだろうか？

シュレッダーで無数の「個人情報」を裁断しながら、私はつい、そんな想像をしてしまった。

5

意 重複
類 密接
意 裁断



◇

当初の業務予定のとおりに午後の業務を終えた私は、五時半に庁舎を出て、帰り道に図書館に立ち寄った。予約していた新刊本が一冊用意できたと連絡が入っていたからだ。

予約本を受け取り、他にもめぼしい本がないか、館内を一周する。貸出は一人十冊までだ。まだ読み切れていない本が家に三冊あるので、七冊までなら借りることができる。二十分ほど見てまわり、五冊の本を手に、カウンターに向かった。

窓口の女性司書は、端末画面の貸出履歴を一瞥し、私の置いた五冊の本を確認すると、バーコードを読み取ろうとする手を止めた。

「既に六冊借りられていますので、本日は四冊までしか貸し出すことはできません。」

「一週間前に、三冊しか借りていないはずですが。」

借りた冊数に間違いはない。貸出カードは常に財布に入れて持ち歩いているので、親族の誰かが利用して借りることもありえない。

「それでは、二重になっているようですね。」

司書の女性は、間髪を容れずに答える。それで私も、ようやく納得できた。

「ああ、貸出データが二重になっているんですね。それでは、そのデータを正して、貸出ができるようにしてもらえますか。」

無感動な表情が私に向けられる。

一瞥
ちらっと見ること。

間髪を容れず
少しもゆとりがないこと、転じて即座にという意味。

▼髪

「いえ、二重になっているのは、データではなく、あなた自身です。」
「どういうことですか？」
「貸出データによると、あなたは一週間前に三冊借りて、一昨日も三冊借りられています。一昨日に借りられた記憶がないということでしたら、あなた自身が二重になって借りられたものと思われます。」
よくあることだとばかりに、彼女の説明はよどみなかった。
「なるほど……。」
私はようやく合点がいった。入力ミスで個人情報データが二重になることがあるのだ。逆に、「私」の存在そのものが二重になることもあるだろう。もう一人の「私」が、一昨日図書館で三冊の本を借りたにちがいない。
「一昨日、本を借りられたのも、今日借りられるのも、同じあなたですから、十冊という制限を超えて貸し出すことはできませんよ。」
まるで私が無理な要求をしているとでもいうように、彼女はすげなかった。立場こそ違え、彼女も「市民サービス」の向上を目ざすべき立場のはずだ。「模範とされる市民対応」からはほど遠いと言わざるをえない。
「納得できません。同じ『私』とはいえ、私自身は与り知らぬかたちで貸出が行われたのですから、私にはこの五冊を借りる権利があるはずです。」
はっきり言って、そこまで本を借りることに執着しているわけではない。だが私は、自分

合点がいく
納得すること。

すげない
愛想がない。そっけない。

与り知らない
そのことに関わっていないこと。関与していないこと。

文 **……せざるをえない**

が「無理難題タイプ」でも、「論理矛盾タイプ」でもなく、「正当な主張」をする利用者であることを彼女に理解させるために、貸出を強要した。

「わかりました。それでは少々お待ちいただけますか。」

彼女はそう言って、いったん奥の事務所に入った。担当部署に電話をかけているようだ。

しばらくして、彼女は相変わらず無感動な表情のまま、カウンターに戻ってきた。

「確認が取れました。正常な状態に戻すということです。五分ほどで二重状態が解消されるそうですから、もう少々お待ちいただけますか。」

「わかりました。」

適切な対応が取られたことに満足し、私はカウンターを離れた。

すぐにしかるべき部署が、どちらかを、「削除」するだろう。どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。

同 強要
意 いったん
意 しかるべき
意 部署

三崎 亜記［一九七〇―］
福岡県に生まれた。小説家。
作品に『となり町戦争』『バスジャック』『逆回りのお散歩』などがある。

《出典》『名もなき本棚』によった。

みちしるべ

内容を捉えよう

1 この作品は、「◇」によって二つの部分に分けられている。前半部と後半部に起こったことを、それぞれ整理しよう。

読み深めよう

2 前半部の「私」の「市民対応」と、後半部の「司書」の「市民対応」を比較しよう。

3 役所に来た「女性」と、図書館に行った「私」は何を問題にしているのか。また、どのような結果になったのか、それぞれまとめよう。

参考

石森さん

女性
・二つあったデータ
←
・消去したデータ
＝本当の私の名前

木本さん

私
・「私」の存在が二重
・二重状態が解消
＝どちらかの「私」を「削除」

自分の考えを伝え合おう

4 「二重の情報」に対する「女性」「司書」「私」の捉え方の違いについて、考えを交流しよう。

学びナビ

5 この作品を読み、自分たちの生活や社会の中で、記号として捉えられているものにはどのようなものがあるのか、話し合おう。

言葉・情報

● 言葉と表現

次の表現を手がかりに、「私」の「模範とされる市民対応」について考え、「模範的」とはどういうことか話し合ったうえで、自分の意見をまとめよう。

・「言葉には最大限の謝意を込め、心中にはさざ波すら立てず」（P35L10）
・「過去の市民対応の積み重ねから、相手のタイプを推し量る。」（P36L17）
・「私は彼女の心に寄り添う姿勢を見せるべく」（P38L8）
・「問題をともに解決する『味方』として認識させる」（P39L1）

振り返り☑

□ 作品を読んで自分の生活や社会を振り返り、読書の意義を理解しているか。

□ 「女性」「司書」「私」の見方や考え方について、自分の意見をもっているか。

□ 登場人物の見方や考え方の違いについて交流したことで、自分の考えはどのように深まったのか、振り返ろう。

この教材で学ぶ漢字

34 **促** ソク　促音　うながす　発言を促す

35 **尋** ジン　尋問　たずねる　尋ねる

35 **儀** ギ　儀式

35 **殊** シュ　殊勝　こと　殊に

36 **致** チ　致命的　いたす　思いを致す

37 **更** コウ　更新　さら　今更

39 **蓄** チク　貯蓄　たくわえる　蓄え

42 **髪** ハツ　理髪店　かみ　黒髪

新出音訓

42 財★ 布（サイ）

『私』と虚構

この小説に描かれているようなできごとが、現実に起こるとは考えにくいでしょう。

しかし、作品を読んだ私たちは、「女性」の不安や安堵、そして「私」の気持ちに寄り添うことができます。現実ではないことを知っていながら、現実と同じように、時にはそれ以上に心を揺さぶられるのはなぜなのでしょう。

本当らしくはあっても実在はしない、作られたもののことを**虚構**といいます。あなたが、もし「女性」や「私」のような状況におかれたらどうしますか。それを想像できるということは、読書を通じて、虚構の世界を生きているということになるのです。虚構の世界で、現実の自分を越え、過去や未来、どこかの誰かになることを体験することは、現実世界を新たに見つめ直すきっかけともなるでしょう。

登場人物の心情や状況に寄り添う中で感じたことが、現実世界の自分にとって、どのような意味をもつのかを考えてみましょう。

広がる本の世界

学びを深める読書案内

つめたいよるに
江國香織

どこか寂しげで淡々としているが、心に響く21編の短編集。

父の詫び状
向田邦子

父親に対する作者の思いが、ユーモアたっぷりに描かれている。

あるような ないような
川上弘美

季節の雰囲気がほのかに伝わってくるエッセイ集。

コロヨシ!!
三崎亜記

その国では、掃除はスポーツとなっていた。

新訳　ジキル博士とハイド氏
スティーヴンソン

「善と悪」という人間のもつ二面性について問う世界的名作。

チルドレン
伊坂幸太郎

五つの物語が一つになったとき、奇跡が起きる。

物語の役割
小川洋子

人はなぜ物語を必要とするのか、その秘密が明かされる。

みじかい眠りにつく前に　Ⅲ
金原瑞人　編
有島武郎／池上永一　ほか　文

池上永一の『サトウキビの森』など10編のアンソロジー。

物語ること、生きること
上橋菜穂子

幼い頃から物語にふれていた筆者が、作家になるまでを語る。

今日も一日きみを見てた
角田光代

わが家にやってきた１匹の猫は、私の世界を変えた。

漢字の練習1

1 次の――線部の言葉の読みを平仮名で書こう。

(1) 恋文を手渡す。
(2) 機を織る道具。
(3) 学問を究める。
(4) 包丁を研ぐ。
(5) 出納帳を確認する。
(6) 会社を辞める。
(7) 革のコートを着る。
(8) 布を裁つ。
(9) 知恵を授かる。
(10) 師に勝る活躍。
(11) 天女の伝説を聞く。
(12) 負担を強いる。
(13) 命令に背く。
(14) 街道に沿って歩く。
(15) 予約を承る。
(16) 専ら聞き役に回る。
(17) 考え得る最善の策。
(18) 和やかに会談する。
(19) 故あって訪問した。
(20) 技術を競う。
(21) 室町時代の絵。
(22) 議題に上せる。
(23) 牧の草に寝転ぶ。
(24) 今昔の感。
(25) 小児科の医師。
(26) 深い峡谷。
(27) お巡りさんを呼ぶ。
(28) 書き初めをする。

2 次の言葉を使って短い文を作ろう。

(1) 夕映え　(2) 反物　(3) 歩合　(4) 血眼
(5) 代物　(6) 声高　(7) 助太刀　(8) 浮つく
(9) 波止場

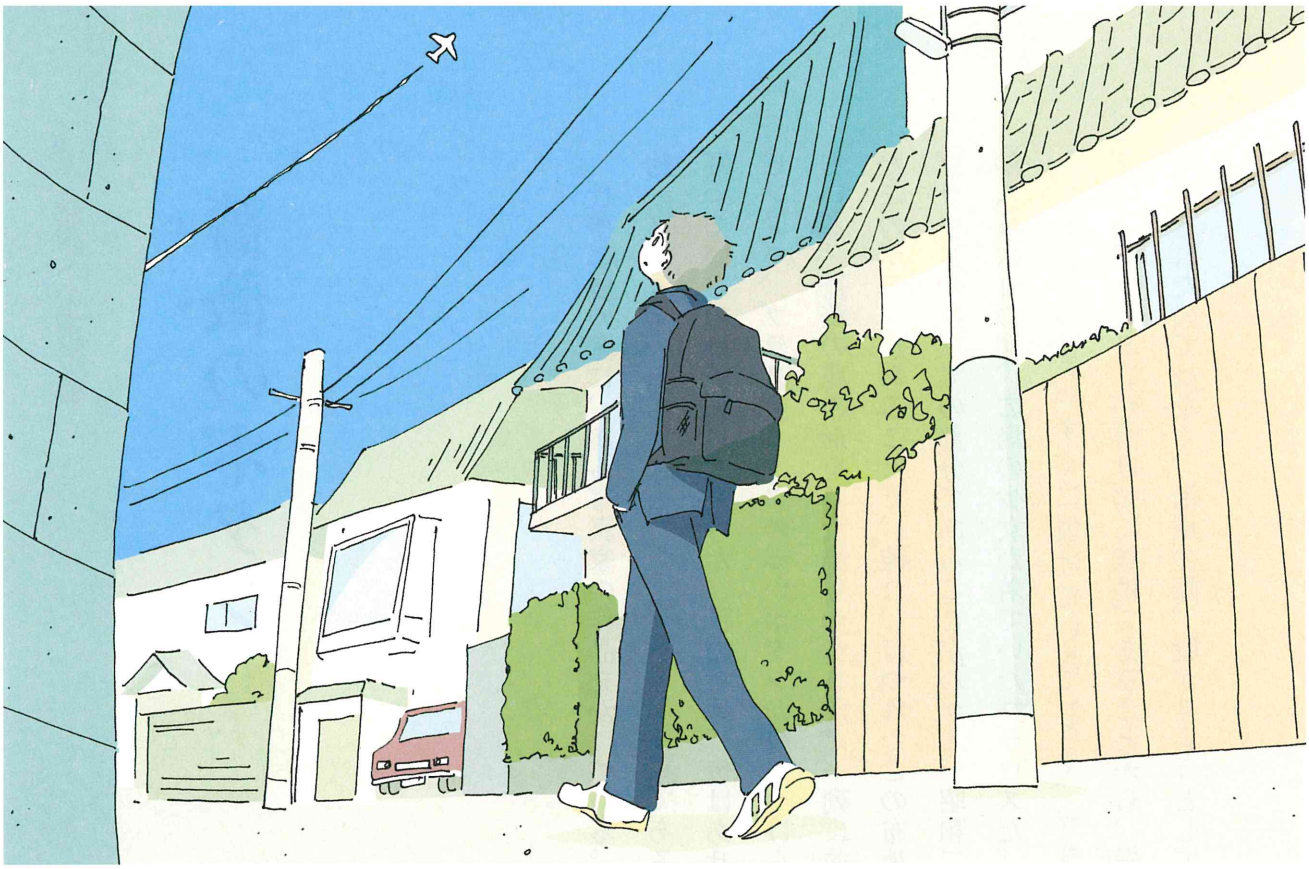
この教材で学ぶ漢字

新出音訓

恋文★（ふみ）
機★（はた）
究める（きわめる）
研ぐ（とぐ）
出納（スイ）
辞める（やめる）
革★（かわ）
裁つ（たつ）
授かる（さずかる）
勝る（まさる）
天女★（ニョ・め）
強いる（しいる・ゴウ）
背く（そむく）
街道（カイ）
承る（うけたまわる）
専ら（もっぱら）
得る（える）
和やか（なごやか・やわらぐ）
故（ゆえ）
競う（きそう）
室町（むろ）
上せる（のぼせる・のぼす）
牧★（まき）
今昔★（シャク）
小児★（ニ）
峡谷★（コク）
書き初め★（そめる）
夕映え★（はえる）
反物（タン）
歩合（ブ）
血眼★（まなこ）
代物（しろ）
声高（こわ）
助太刀（すけ）

「付表」の語

お巡りさん（おまわりさん）
太刀（たち）
浮つく（うわつく）
波止場（はとば）



二　歴史をひらく

薔薇のボタン　梯　久美子

学びナビ　構成を工夫する
構成を工夫して主張をまとめる

メディア・リテラシーはなぜ必要か？
森　達也

新聞が伝える情報を考える

漢字の広場　1　呉音・漢音・唐音
文法の小窓　1　助詞のはたらき
広がる本の世界　2
四季のたより　春　春惜しむ